こゝろのやみを

致一の巻

形式と内容……一
客体の法性法身と主体の心理の形式との致一……二
絶対理性即ち精神と自己の理性即ち形式の致一……五
活　動……七
形式と活動……一一
一切知と一切慧……一三
禅と真宗……一三
客主冥合は理性主義……一六
活動、救済又解脱霊化……一六
絶対理性と真如と彌陀法身とは同体の異概念……一七

形式と内容（活動）との二分（宗教的意識）

心理の二分類によれば形式と活動とす。形式要素の多き作用は思想判斷理性等にして、活動要素の多きは意思想像本能欲望等。
理性は形式にして精神中に存ずる雜駁なる活動を統一する形式にして抽象的なり。

客體に二種の法身あり。曰く法性法身。曰く、方便法身なり。主體なる人の心理に二に分つ。形式と活動となり。

宗教的意識は客體の神との關係によらざれば成立すべきものにあらざれば、宗教主體の心理の二分類に區別して、神との關係にいかなる客體が主體の形式と致一し神と合一したる狀態にいたらんとならば、またいかなる情操欲望等が神の中の活動にあらん。其大概を述べて宗教意識の狀態を表さん。

宗教的意識は神と人との關係致一の心理機能にして、何れかの一方にては成立すべ

きものにあらざるも之を研究するのには區別して說明せざるべからず。先づ初に客體の神の本質を知り而して後斯の如くの客體の本質には如何なる心理を以て關係的に致一冥契すべきやを信知せざるべからず。

客體の法性法身と主體の心理の形式との致一

眞神即ち阿彌の法身とは、學語に云ふ眞如の義にして、絶對不識精神非物質的にしてすべての精神内の活動と感覺等を捨象したる如き至純至精なる絶對無限の精神態なり。此眞々如々の妙體や、超時間的超空間態にして、超世間的實體の眞理。是の如きの妙理は萬物衆理の上に出て超然として最上高等甚遠玄妙の實在なり。虛徹靈明にして不可思議なり。

是絶對の不識精神態、若し之を表明せば第一圖の如し。

主體の心理より云はゞ心象二分類中の一なる形式。形式には要素の多き作用としては思想判斷理性等なりと雖ともこの形式がすべての精神中に存する處の雜駁なる活動をして統一總括する心理を名づけて理性とす。最とも抽象的のものなり。

客體との關係

客體なる阿彌陀法性法身は絶對なる不識的精神なるを以て、主體はこの絶對的觀念に凝神し、すべての内活動を消極に排除せんと欲するも、一の意思を除けばまた他の想像をおこし、思想等は甚だ排しかたし。最も抽象的形式的に絶對理性的に觀念し、彌陀は是無限の精神にして空間として彌陀の實在ならざるものなし。この眞々如々の眞理に對するときは一切の萬物は幻化に異らず。純粹眞理は大智懸光明の本體なりと觀念する、或は頓に或は漸次に一旦洞然として貫通し、自己を脱却し天然の心象を超えて、十方法界浩々天開け地闢け心界の一切も一時に開顯して、たとへば太陽東に昇るとき天地一時に顯現するが如し。こゝに至つて初めて知らん、自己の理性は絶對理

性と同一の形式にして個體機制の心象が同一の理性をへだてしことを。自己理性の根底は正しく是絶對理性なるを。個體の人類が同じく根底に到達せば悉く同一理性の個體なるを覺らん。この深遠にして統一なるは即ち是阿彌陀の法身なり。故に觀念的に理想の極度に至つて彌陀の法身と冥合致一す。

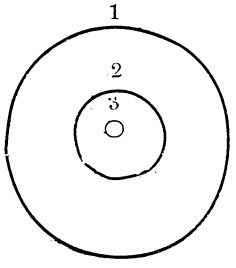
活動の意志想像には、自己の個體の物的體質ある時は、自我を執し、自己の世界と執し、事々物々の執着を生じて理性を覆蔽するに至る。

理性至純の極に至つて超世界超然たる至眞至靈不可思議の眞神之を自性天眞佛と名づけ、絶對の精神とも眞如とも、宗教の用語を以て無限光絶對光如來と名づけたるなり

虛徹靈明にして十方界に照徹す。過去の際より未來の際に徹照す。絶對理性は不識的精神なれども人の意識の形式的理性の根元極度に到達し、絶對の精神と人の意識に致一する時には意識的精神の絶對と現じ來るが故に絶對光佛と名づく。

客體の法性法身と主體の理性即ち形式の極めて純粹なるのとは同じき本質にして冥合すべきものなり。理性は本來自性天眞なるを以て習慣性の如くに習慣より成立せしものに非ず。是先天の心理なり。然れども絶對理性なる客體との關係致一が實現し來るは後天にして即ち宗教精練の結果にして經驗實在なり。宗教の關係に絶對の精神と致一し實在が實現し來るときに至つて、彼の實體は後天にあらずして先天なるを知らん。之を始覺が本覺と致一したる狀態とす。

絶對理性卽ち精神と自己の理性卽ち形式の致一



(1)は絶對理性にして即ち客體の彌陀なり。
(2)は世界即ち天然の現象界なり。
(3)は自己の精神即ち
3は自性天眞爛漫たる理性は第三生理機制の感の爲に覆はる。是の天眞を覆ものは先天の心

理規定と生理機制の免れざる處なり。

第二は生理機制のしからしむる處

第二世界依屬は免れず

第二世界は人類共同の惑より感ずる處。

第三は絶對にして現象界の本體にして是宗教にての法身なり。

第三は生理機制の心理、即ち天然人格の意識を超越し、天然の世界觀を超絶し、絶對の本體は是理性大光明なりと觀念凝神し、一旦豁然として主我の殼を開放し、天然の世界觀を超えて絶對理性大光明のみなるを觀ずるに至らん。是の如きの心天眞に至らば彌陀の外に我あるなきを識らん。

古來佛教の大乘教觀は理性即ち形式の理觀の要素のみ多くして宗教的活動の要素に乏しかりし。この反對に淨土教は活動的要素のみにして宗教的關係の形式を忘れたるが如し。本より活動といへ形式といへ心理一體の兩方面なるを以て活動は波の如く形式は大海の如く相離るべきにあらず。故に形式家に於ては活動といはゞ飽くまでに非（ ）して惡魔の如く怨敵の如くに排斥す。順風還つて航路を助け此岸を離れ彼岸に到るの能力あるを忘るが如し。宗教的活動即ち協神的情操意志の活動あるに非ずんば何を以てか二利の極に達せん。

次に活動

宗教的關係の客體に方便法身あり。即ち絶對の大精神即ち眞神は、寂靜眞如の眞空天眞無限の知のみならず、一切能と一切慈との大活動力ありて、徧時間徧空間一切の自中存在なる力となりて、法界衆生の精神なる活動と現じ來つて、無限の勢力と無限の靈福とを與ふ。

佛陀は宗教關係の中の衆生に佛知見を與へ、如來妙色身相好光明普く法界に周徧し念に隨つて之に應じて映現したまひ、或は淸淨莊嚴の妙刹を示現し、諸天神菩薩等の

隨類の身を現じて、衆生の宗教的關係の内容を充たしむ。この客觀に對する内容には無限に對して抑(損)し、彼を畏敬し、神的憧憬の中に無限の靈妙なる感情を現じ、無限の光に信賴す。

感覺には無比の莊嚴に妙色莊嚴の光耀煥爛なる十方の天地に徹照し微妙の天樂は宮商自ら相和し等六根清徹にして感性を清淨ならしめ、彌陀と關係の心情は苦毒と罪惡感情にて自ら脱却して神的快樂によりて身體の苦惱をも感すべきにあらず。

苦毒と罪惡の感情との動機は必しも外界の刺擊にのみ依るにあらず。自己が之を苦毒と感ずべき生理規定の衝動より感ずるところにして、自己離脱し彌陀の恩寵と融和を得る利樂を感ずる時は(　)

脱世專念の熱情によりて自己離脱しぬれば、自己の主我妄執自ら解脱すること、譬へば春の日東に上つて無明の闇夜曙するが如し。神的平和に内心沈靜なるが如き内容の靈福いかでか之を(　)

彌陀はまた佛知見を與へ、常に自己内心の指導となりて菩薩の正道を行動せしめ、神靈態と現じては良心を醒覺し、内心の威嚴實に威光おかすべからざるの光明は(爛)々として内容を照耀し、無限の力となりて内心の惡魔を降伏し曾て胸中に潛伏したる内魔の巢窟も照して、惑賊を退散せしめ、主我の魔王もこの無限の光りの中には舊來の城廓瓦然と解裂す。その眷屬なる我見我慢の幢も忽ちに摧碎せられて其趾をとゞめざるにいたる。

貪戾の瞋怒恨戾覆惱等の族もこの神靈の光の中に消滅せざるを得ず。

神の正義の光の中に不正の意象を轉じて忽ちに正義と靈化し、人は主我の闇黑の中に自ら室を構へて佛性は睡眠せるが故に、傲慢も自ら擧て是とし、不正も自ら正とし非惡にして慚愧なきも正義の光が入り來りてその深室に徹照し來る時は、忽ちに昨日の非を覺りて正義の光の中に化せられざるを得ず。

殊に宗教的活動に對する客體の概念は恩寵にして、すべての自己は神の前には一と

して美なるものなく罪惡に充されたる精神のかたまりなれば、唯神の恩惠によりて已に亡びたる宗教意識も復活して神の神聖同化を辱ふすべき光榮をよろこぶ。

形式理性の中には我もなく彼もなく同一眞理にして、感情には我は罪惡の凡夫黑暗と苦底に墮落すべき罪惡の凡夫が大我の彌陀を父と賴む一子を惠む恩寵の外に依賴すべき道なきを感じ、此外に眞の父なきを感ず。

この身は本より本來の我に非ず。天然の宇宙も實際の依屬に耐ふべきに非ざるに於ては況んやこの地球に於てをや。この肉體の爲に暫く依屬すべきも、この精神をして畢竟の依屬とするに耐ふべきに非ず。絶對なる彌陀の外に何の處にか歸すべきものかあらん。

宗教的形式のなき宗教は理性を忘れて感情にのみ神を信ずるが故に、神の實在を證明し理性の致一をなす能はざるが故に、自己の理性に滿足を與ふること能はず。理性は心理のすべての活動を統一總括する權あるを以てまた宗教の關係には絶對理性との致一を證明し、(　)

形式と活動。理性と事識

藕益師の要解に事持と理持とを出す。

事持とは西方の阿彌陀有ることを信じて而も未だ是心作佛是心是佛の理に達せず。但志を決して願つて生を求むるを以ての故に、子の母を憶ふが如く時として暫くも忘ることなし。

理持とは西方阿彌陀佛は是我心具と信じ即ち自心所具所造の洪名を以て繫心の境と爲し暫らくも忘れざらしむ。

今曰く、理持とは主體の方面よりいはゞ、客體と關係の宗教心理の形式にして、絶對理性との致一にして、是一切の活動を統一するの精神なり。虛徹靈明にして譬ば明

淨なる鏡の體の明淨にして表裏に暢映するが如し。

事相とは宗教關係の活動にして、彼の恩寵によりて已に沒したる罪惡より救ひを被る彌陀の無極の至尊と罪惡底下の凡夫との懸隔も、父子の關係によりて身の淺劣を忘れて慈父を憧憬の情止みがたし、等すべての感情及び神的欲望等皆活動の要素なるものは事相と名づく。

主體の心理に形式と活動とは相伴ふて一方を離すときは人格をなす能はざるが如し宗教の關係に於ても形式と活動とは具備せざるべからず。

また事相は鏡中の影像の如し。鏡の體を離れて映現すべきにあらず。人の鏡を愛するは鏡體の明淨なるを悅ぶにあらずして其中に映現せる面像を見まくほしくて彼を愛する如く宗教も客體に(　)する神的(　)求憧憬等の心念は悉く心理活動的にして、宗教の要素は活動に多く、活動には慕ふべき相好光明慈悲等の客體を表明するに具象的表明に非ざれば相當せざるなり。

一切知と一切慧。形式と活動。

客體の一切知は絶對理性の形式的にして一時一念に徧空間徧時間に同時に直觀的に寫象す。

一切慧とは、佛客體の精神は絶對にして人の活動的要素も人格なる心とは其性質を殊にして、生理的機制的の垢穢なく、其內容も絶對不識精神にして理性なり。一切慧といふ、一切能は絶對理性の形式的にして一切慧は理性なれども活動に相應する精神なり。

禪と眞宗。形式と活動。

我國の佛教中禪の修證は宗教的形式即ち純粹理性の實在と致一的に證するを以て極

致とす。故に客體は自性天眞佛自己の根底なる絶對理性に致一せんことに修練をなす彼の絶對理性に到達すべき機として一の公案によりて之によつて專心凝神し一旦豁然として天眞現前することを得。公案一則を通ぜば亦一則。終に天眞に達すべし。

已に其絶對理性と致一し已んぬれば一切の活動を統一して理性の旗下に一切の活動を服從せしむ。彼は客體と恩寵なる要素を要せず。故に動もすれば彼は活動を神よりの動機とせざるが故に活動は世俗的自然的なるを免れず。

眞宗には神に對する宗教的關係の活動の要素の豐饒なるが故に、すべての自己の活動は其泉源を神として、彌陀の中の活動として感じ、常に恩寵の關係に感謝の念斷えざるを見る。絶對理性は即ち彌陀なるを以て之を神とし、自己は理性の彌陀の光によりて顯示せらるべく、故に衆生の統一は神なるを以て自己の理性が自己の活動を統一すべきものにあらずと。

眞宗にては活動のみを以て宗教意識は足れりとするが故に宗教關係の形式の中に神と冥合を要せず。

若し眞宗の如く宗教活動のみを以て信仰とせば唯客體に依憑信賴するの外なし。いかにとなれば活動的要素は概ね生理機制の關係より成れる心象なるを以て、本來絶對精神より見ればあるべき理にあらざるものなり。

この活動をだに客體に投じて餘なき時は、餘は期せざるも不滅の理性は顯現すべきものなればなり。この理性は即ち彌陀の本質なるを以て活動を彼に依憑し已ぬれば、自ら致一す、致一は自己の能くする處に非す唯自己は歸依信順すべきのみと。

理性は彌陀と歸命の曉自ら現るを以て自ら期する要なしと。

亦禪に於ては絶對理性顯現すれば其光にてすべての活動をてらし之を支配す。故に絶對理性と冥合致一を捨て根もなき活動を何の必要かあると。

自己の根底に達すれば即ち絶對理性なり。故に自己は佛性本自具足すとす。

客主冥合は理性主義

宗教客體は是絶對理性即ち不識的精神なりと判定し、

個人の精神も絶對精神の一員にして面も生理機制の爲に無明染汚等の惡素質の覆ふあつて其本質を汚す。而れども若し神的觀念と心理の修練によつて一旦この絶對精神と冥合するあらば、

理性なるものは變化すべきものに非ず。天然の人は天然規定に仍る。未だ理性實現せざるも宗教の精修は之を發見することを得。

活動的心機は天然の惡質を宗教の修養によつて大に變化することを得べし。

活動。救濟又解脱靈化

心理活動に對する宗教客體は衆生が天眞の理性が生理機制の規定によりて大に心象を變化し理性の光は染汚せられて眞金の鑛垢の中に在るが如し。生理規定より肉慾我慾は自然の結果、

この心理活動なる感情には苦毒罪過等の不靈の狀態は脱却して神の光の中には靈福のみありて充せらる。

主我主義を脱して主我が迷妄にして眞理に非ざるを感じ天然が世界依屬を脱して絶對依屬と變じ、

意象には世俗情操等は變じて聖靈態菩提心と靈化するに至る。

絶對理性と眞如と彌陀の法身とは同體の異概念

この現宇宙の實體は空間を超越し時間を超え物質を超絶し絶對不識的精神態といふべく、また絶對理性とも稱すべく、佛教にて是を眞如と云ふ。眞は眞實不虛、虛妄の物的等に非ざるを、如は如々の眞理三際易ることなし。自中存在如々不動、これを宗

教の用語には即ち

無量光壽と稱し上り、此絶對眞如の光り大智慧は徧空間徧時間にして而も萬物の根底となりまた客觀界には

	終局目的	世界	本體
體	如來 眞如の顯れた時が 體大 一切法眞如平等にして增減せざる故 本體を顯現する所の光なり 如來の此無限の光 起信の本覺。	世界の相待的規定は偶然にあらず。規律的統一的の秩序を有し自己より生せずして秩序の高等なる根底より 經に、如來は是法界身 この機械的世界は是如來を根底とす。 此天然世界を絶對とし根底とする如きは幼稚なる宗教意識が識る處にして未だ絶對の根底を知らざるなり。	如來の本體は非物質永恒自中存在。 其本質は遍空間遍時間動力遍在の主體。 不識精神態 絶對理性 不識精神態 精神、相と用と即ち一切慧一切能なり。本質は自中存在即ち眞如 純粹なる自中存在より顯動態に開展し其慧は理想的內容を理性的に定め其の能動力的に之を現存に轉す
無限光	若人欲知眞空理內心眞如一心に觀じて無限光の中なる世界及び我らたることを知るべし。 心理的關係には智慧光のもとに於て關係を說く		

相

終局目的の光明、光明遍照攝取不捨
無邊光によつて如來の四智と
如來は信仰の機能致一的に四智の形式をしらしめたもふ。

相大
如來藏、無量の性德を具するが故に。

無邊光 一切智慧
現存の理想的內容を理性的に定め
無邊光の衆生心理發現には淸淨光佛と歡喜光と智慧光との

天然秩序も終局秩序も宗教意識には同じく如來の理性より出でしなり。故に二者協和せざるべからず。

終局目的論證明は神と世界過程に根底
神に智慧の定相を附和し
一切を開展し休止なし。
一切の洽き一切慧態ありとなす。
終局目的に顯はる理性は只天則秩序に現はるゝよりは高等なり。即ち統一的系統の外の目的あり。
此目的を現實にする爲に之に副ふべき方便を選ぶの選擇あればなり。
話的には此二理性を分別するも絕對理性の中に一なるは謂ふまでもなし。

一切智慧
終局目的とは如來の一切慧は衆生の精神に含蓄せる理性が如來の目的なり
終局統一の彌陀に歸入すべき知が人の心に開展して如來と致一に開展せしむるを一切慧といふ。
終局目的の光明によりて眞實最奧の意義を得たり
一切慧は終局秩序を支配する理性にのみ關していふ。光明遍照攝取不捨とは此義なり。

用

如來不可思甚(　)用
恩寵によりて啓示し致一
佛知見を與へ
神靈態として無上道心の原動となり。
主觀的正義、四弘誓願、六度、八正道、十善等
客觀的正義、還相回向

用大
能く一切の世間出世間善因果を生ずるが故に

無碍光 一切能
動力的
形而上の一切能の功德が衆生の心理に關係して靈化の功は不斷光のもとにて詳明すべし。

一切活動の源泉は如來にして絕對なり。
一切の物質世界も實體も如來を根底とせざるなし
如來の動力的遍在神の本質は非空間非時間非物質
如來の活動は一切動力の中に存して之を一に包括し遍時間遍空間遍活動態なり。

一切能
空間を造り出す主體は一切空間態の本源にして自己の中に觀念的に其存在の位置をなせり。
精神態は凝固如々に非ず自ら出でゝ活動し、永恒
其自體の中に活動して空間時間の形式を生產し、
實の生活をなさしむべき自中存在
神の動力遍在によりて何の時も神の中に存し其活動
恩寵に近きを知りて安立し、

如來の永恒なる自中存在は其絶對不變なる實體格の空相を完全する者にして常住なり。神に信賴するを增進し此と同時に神の本體を何れか一の物質的存在の中に發見せんとの誤を防ぎ神を求むる精神をして神の精神的啓示を其本質に適したる唯一の啓示に求めしむ。

如來に一切擔保せられざるものは全く無なると知れば宗教客體の超越は無限にして解脫の力に無涯の信賴をなすに足り此と共に個人の我意を以て無限優高の一切能と其目的とする故に反抗するの全く痴なるを知らしめ一切能の理性に信賴歸托するの唯一行法なるを知らん

無對光

對絶の義なり。如來本絶對にして三身圓證、三大は是如來の一體。

前の三大を統一し三身を致一し、三德を總括し、十佛の自境界を合一し、十方三世諸佛賢聖を攝統し、學語にいはゞ是眞如、即是一法界大總相法門の體、眞如門生滅門を總べ體相用を統一す。宗教用語に絶對光。

是本經の宗致なり。無對光また絶對光とも三義あり。獨尊と統攝と歸趣となり。

獨尊とは十方三世諸佛の本佛にして十方法報應の諸佛は悉く彌陀の超勝獨一の至尊より諸佛は彌陀の眞理を顯示さんが爲にしたるに外ならず。如來もと法界に周徧し萬物の根底悉く彌陀ならざるなくも、一切衆生悉くこれを根底とせざるなくも、無碍の用より諸佛を化現して衆生に化用を施すにあらざれば其恩寵を示すに由なし。また諸佛聖賢は是彌陀の實在を實現なしたるに外ならず。十方諸佛聖賢は其內面には精神的に統一せらるゝなるも表面に於ては各々無邊の刹土に於て無數の個體となりて現ずる今は內面なる根底を隱して暫らく表面に如來は是最尊獨一にして諸佛の及ぼざる處なりと今經の如し。

諸佛賢聖は唯彌陀の光榮を現はす爲に世に出現すとは今經に、一切諸佛賢聖悉く無量壽佛の功德を稱讃したまふ、と。

統攝の義。

十方無量の法報應の三身悉極樂無量壽界中より出づと。極樂とは是眞如涅槃の別號無量壽とは一切を統一するの稱號。顯動の上には十方諸佛、分析には法報應の三身ありと雖ども衆生世界妄に境界を見るを以ての故に無量の法應身ありと。大智用無量の方便あつて示現するのみ。

故無量の世界無邊の衆生心行の差別亦無邊なる大智力ありてのみ佛もと絶對にして無二無別なり。

法華に、如來演所の經典は皆衆生を度脫せんが爲或は己身を說き或は他身を說き或は巳身を示し或は他身を示す。或は巳事を示し或は他事を示す。諸の言說する所皆實にして虛しからず。

所以者何れは如來如實に三界の相を知見し生死の若しは退若しは出有ことなし。亦在世及滅度者なし、實に非す虛に非す。如に非す異に非す。三界の如くに三界を見す是の如の事如來のみ明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生種々の性、種々の行、種

々の憶想分別を以ての故に諸の善根を生せんと欲して若干の因緣譬喩言詞を以て種々に說法し、所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。如是我成佛より已來甚大久遠、壽命無量阿僧祇劫常住不滅

意の曰く、無量壽常住不滅なるものは亦無量光にして十方を盡すべし。是の如きは是本佛なり。其他種々の隨類の身は是分身なり。是釋尊の根底なる絕對精神の如來なり。西藏の佛經典に云く、釋迦牟尼の本地は阿彌陀佛なりと。

統攝

阿彌陀經に、釋迦牟尼佛我今阿彌陀の不可思議功德を讚嘆するが如く東方六方各恒沙諸佛各其國に在て其實を證すと。

藕益師解して云く、是諸佛釋迦皆阿彌を以て自と爲と。釋尊表面よりは特別の一佛の如くなれども內面には絕對なる彌陀に根底に統一せらる。諸佛も又然り。故に諸佛といふも一體の兩方面のみ。統一なる彌陀より見れば常に絕對なる本佛にして絕對なり。また世界の中に隨類の應身より見れば十方世界に無邊の身を現して常に相續して常に化敎す其根底の統一は悉く彌陀なるを以て釋迦諸佛悉く阿彌を以て自とす。

歸趣。

彌陀は根底統一的のみならず歸趣するところ悉く阿彌にあり。阿彌を離れて終局の統一あることなし。

阿彌光明普く十方佛世界を照して念佛衆生を攝取して捨てずと。十方世界遺あることなし。悉く精神界を攝取して捨てずと。是彌陀の終局目的に統一せしむる權獨り阿彌にあり。此一切慧にして終局目的の光によりて一切能を離れて歸趣する處あらず。

故に經に云く、三世諸佛は念彌陀三昧に依て正覺を成ずと。十方世界と云はゞ衆生界のみならず世界も一切は悉阿彌絕對體內ならざるなし。

獨尊

如來の本質は通じて云はゞ十法界の最上位に位して法界に周遍せる最高等の絕對的

精神體にして一切の精神は未だ其階級にありて無明の素質を全然脫すること能はず。如來の本質のみ獨朗天眞絕對精神の光明態にして一切の處に周徧せる實在なり。

如來の本質は世間に解せば天則世界の規定する形式時間空間因果より出づる物質を超越し超然として獨明にして而も一切の活動等の形式を擔保す。如來の本質は非空間非時的にして自中存在永劫精神態。

如來の本質は天則世界の規定形式なる時間空間物質を超越して而も此活動の形式を擔保し、超勝獨明の本質を明する消極積極の二面あり。消極としては非空間非時間非物質として其活動は一切動力の中に存して之を統括す。遍時間遍空間遍活動態なり。積極に云はゞ自中存在永恒不變の精神態なり。

遍空間の精神態の故に實在せざる處なし。此精神態を眞如と名づけ亦如來と云。徧空間に實在して之に敵匹するものなし、すべての物は之に對すれば虛妄の法にして眞理に非ざればなり。此眞如のみ眞理なればなり。

二に無雜なり。すべての物は心に無明不覺の質と物質との複雜なる在り。如來の本質は純粹至純、無明と物質との雜ゆるなく至精純然たり。眞如即ち至純精神態のみ

如來の本質は不易にして常に同一なり、凡て物の無常住にして生滅して常なきは無明等の質があつて其生の暢發其極に至らずして圓滿の地に至らざるが故なり。如來は本質のみにして圓滿充足して缺くる處なき故に變易あることなし。

如來は無始無終にして常に現在にして悠久なり。如ゞ不動の眞理なるを以て。

如來の體は無限にして一切に光被せざるものなし。蓋し凡そ因生の物は皆他物の爲に限盡せらるゝを以て苟も此處に在る時は同時に彼處に在るを得ず。如來は徧空間徧時間にして遍活動自中存在の精神なるを以て一切の處一切の時に實在し活動せざることなし、如來は自中存在不識絕對精神態にして且一切智慧と一切能とを屬性として一切を產出し一切を終局に攝取す。

彌陀は三身を統一し十方一切諸佛を總括し徧時間徧空間自中存在にして而も萬物と

其本質を同せず。最勝獨明なり。自性天眞無對の精神光明態にして萬物中に在て虛徹靈明に一實眞如の如々の理如々の智なり。是を如來の本質とす。本質に於て超勝獨明と云。

彌陀は是絕對の精神にして同時に精神の光明なり。十方三世の諸如來は悉く念彌陀三昧によつて同じく覺を成ず。此絕對の光によるに非ざれば正覺を成ずる理なければなり。彌陀は是一切諸佛の本佛一切は此に依て生じ是に攝せられ是を以て根底とし此によつて解脫し靈化せらる。故に彌陀を以て超勝獨尊とす。般舟經に三世諸佛念彌陀によつて正覺を成ずと。

獨尊の故に諸佛は悉く拱向敬禮し讃禮す。

阿彌は是最高等の宗教客體にして絕對の光と生命との主、處十方一切の諸佛賢聖はこの客體との關係に依つて解脫靈化せられたるものにして、即ち彌陀によつて正覺を成じたるなり。故に諸佛は常に彌陀の外に眞の神あることなきの理を示し是によつて衆生に敎ふ。諸佛は常に無量の最勝なる光榮なる聖名を以て讃嘆し稱揚したてまつる其不可思議の功德を嘆譽せざるなし。其ゆゑは聖き名を聞くものをして眞正なる利を得せしめんが爲且つ自己が正覺を成じたる本因を感謝せんが爲なり。

諸佛聖賢は自己の已成正覺依彌陀の報恩のみならず眞理の光りは徧空間時に徧活動せる一切知と一切能とは之を讃せざらんと欲すと雖ども能はざればなり。

彌陀は是諸佛の本元なり。一切の諸佛この彌陀を離れて正覺を成ずべき理あることなし。無限の生と光とは是彌陀なればなり。此無限の光と命によりて靈化せられざるものを凡夫と云ふ已に靈化せられたるを諸佛といふ。諸佛は是眞理より出でたまへり

楞伽に、十方三世の法報應及變化身悉く無量壽極樂界中より出づと。無量壽とは是眞實如々の理智極樂は是無爲泥洹界なればなり。

昭和三年十月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區豊訪町五五
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五
市京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番